

図書室月報

2026年(令和8年)9月5日 第760号

公民館の図書室は
学びの入口・みんなの本棚

国立市公民館 国立市中1-15-1
TEL.042-572-5141 / FAX.042-573-0480



PDF版

〈2026年5月16日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

小池伸介著

『ある日、森の中で

クマさんのウンコに出会ったら

—ツキノワグマ研究者のウンコ採集フン闘記—』



森 幹彦

一つ目は、先述の記事にも関係する耕作放棄地の問題です。人間が土地から離れていっても、人間が育てた柿などの木は残ります。また、徐々に自然に還る中で人間の生活域との境界が不明瞭になっていきます。人間にはその柿がまだ庭の木でも、クマには、怖い人間がおらず実が取り放題の木になっているようです。二つ目はクマの生態です。冬眠期間には個体差と地域差があります。冬でも目撃情報があるのは冬眠前や冬眠後のクマが常にどこかにいるためで、冬眠しない

このような折りに著者の講座があると知りました。ぜひともお話をうかがいたいと思い、今回の図書室のつどいに参加しました。お話の中で特に強く印象に残ったことは三つありました。

そこで、私が大学で指導するゼミの学生たちに当該記事を共有しました。社会的な側面について議論を進め、クマの生態や人間が本来すべきことを多くの人々と考えていく必要性に思い至りました。現在、そのためのゲーム型教材をつくろうと、学生たちと試行錯誤しています。

近年、ツキノワグマ(以降、クマ)が人里に現れることが社会問題になっています。多摩地域でも出没情報が頻繁に見られるようになり、何が起きているのか、なぜそうなるのかに興味を持つようになりました。そのようなときに、著者が大学で出された研究成果のプレスリリース記事を目にしました。耕作放棄などにより人間が山からいなくなったためにクマの生息域が広がったことが示唆されていて、クマが積極的に出てくるとの勝手なイメージを覆されました。

クマがいるわけではなく、温暖化も関係ないそうです。また、クマは、最も痩せている夏期と最も肥えている秋期で摂食カロリーの10倍以上も異なっており、季節ごとに食べられるものを柔軟に食べるということです。そのために常に食べ歩いているらしく、豊作の年は行動範囲が狭くて済み、凶作の年は広がって昨今のような状況になるようです。

三つ目は、調査についてです。クマは雑食性の動物ですが植物を完全には消化できず、液果の種子が発芽できる状態でフンに混じって出るそうです。小池先生はクマの行動範囲は他の動物に比べて広いことから種子が遠くまで運ばれることをフンの追跡から突きとめて、クマが植物の分布を広げる役割を担っていることを解明してきました。さらに、クマにボイカメラや位置情報発信器を取り付けて、クマが木の实を食べている姿、繁殖の様子、立ち回った場所など、人間の目だけでは追えない情報を記録する調査もされており、いくつかの事例を紹介されていました。情報分野を研究する私にとって、このような形で情報機器利用が世の人の目に触れて役に立つこともあるのかと感慨を覚えました。一方で、真面目にフンを追いかける研究も楽しそうで、シートンやファープルの本を楽しんでいた少年の頃の自分を思い出しました。

お話は最初から最後までずっと興味の尽きないものでした。質疑の時間もたつぷりとお話いただき満足しました。まだまだここに書き足りないお話がいっぱいあります。ぜひ著書も読んでみてください。たくさん驚きとたくさんのお納得があると思います。

ブッククラブから

対話の姿とは

— 朝比奈秋 著 『植物少女』 を読んで —

清々しい。この本を読み終えた直後、私の心に湧き起こった感情だ。重いテーマを感じさせないほどやすく、成長していく主人公に拍手を送りたくなる。

本作は、自らを産んだ際の脳出血で植物状態となった母親の病室に通いながら、主人公美桜が成長していく物語だ。ベッド上の母親は、わずかに開くまぶたからは白目が見え、呼吸をしていて、口の中のものを飲み込み、刺激に体をくねらせる。美桜に、温かい眼差しを向けることも、言葉をかけることも、抱きしめることもできないのだ。

しかし美桜は、そんな母親をありのままに受け入れる。見て聴いて触れて匂いを嗅ぎ、乳を吸い、語りかけ、悩みを打ち明け、目に見えない何かを受け取り、解釈して、母親との対話を深めていく美桜の姿は、時に反抗期のように母親に様々なことをしでかす様子すらも、親子の不可欠なプロセスとして深く心に響く。

そして他の植物状態の患者や家族、医療スタッフとも、美桜はそれぞれの方法でコミュニケーションを取り交流を深めていく。この姿は私たちに、「対話」とは単なる言葉のキャッチボールではないという重要な事実を突きつける。相手に深く関心を寄せ向き合おうとすること、その先に生まれ得るものを共有する、その過

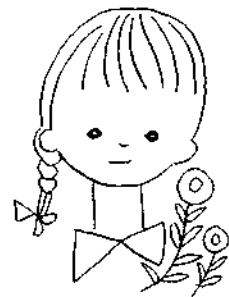
程そのものが、「対話」なのではないか。心を通わせる形は、言葉の有無に関わらず、属性や関係をも超えて、人の数だけ存在するのだと気づかされる。

本作は、私の過去の記憶をも呼び覚ました。約十年前、危篤で植物状態のようになった父と過ごした最期の一週間だ。生前の父は、元気に暮らせないなら生きる意味がないと明言しており、なるほどその通りだと思っていた。しかし、意識のない父を前にして、私の胸に溢れたのは、生きていることへの大きな安堵と歎びだった。反応がなくても体は温かく、生きていること自体が嬉しかった。

家族交替で付き添い、今日も朝を迎えられたと喜び合っていた。父が父らしさを失い寝たきりになっても、ただ呼吸をして存在してくれていることが家族の心を支え、毎日の張り合いとさえなった。言葉を交わさずとも存在を感じ取り、慈しむその時間そのものが、深く濃密な「対話」だったのだ。

ブッククラブで、本作を読み、認知症の母の介護と看取りを思い出して涙が出たと話された参加者の方がいた。どんな状況になっても、かけがえのない大切な本人であることは変わらない、という言葉に深く共感した。姿や状態が変わっても、相手と向き合い対話を重ねてきたからこそ辿り着く境地なのだと思う。

K・W



『植物少女』は、言葉だけではなく、心を通わせる方法は人の数だけそれぞれに在ることを、静かにそして力強く教えてくれた。対話の本質とは、相手を知ろうとし、関心を寄せることにあり、そこからいかなうにも生まれ広がっていく、愛おしい営みなのだ。

さて、私たちは、普段言葉を交わせる相手ともどれだけ「対話」ができているのだろうか。日々の暮らしの中での気づきを大切に、対話の力を育み、紡いでいくのならと願う。

(朝日文庫)

くにたちブッククラブ

— なぜ、その道を選んだのか —

野上弥生子 『真知子』

(ちくま文庫)

講師 おだいら 小平 麻衣子
(慶應義塾大学・日本近代文学)

とき 9月17日(木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141
またはホームページより申込



* 次回は10月8日(木)
じゅんこ 高瀬隼子 『おいしいごはんが
食べられますように』
(講談社文庫) です。

新着図書から

〈歴史〉

メアリ・ウルストンクラフトとフランス革命

清水和子 (京都大学学術出版会)

温泉放浪記

森まゆみ (新潮社)

〈社会科学〉

たとえば「自由」はリバイティか

渡辺浩 (岩波書店)

統一後のドイツ

シュテツフエン・マウ (白水社)

〈ガザ〉を生きる

アフメド・アルナウク (原書房)

康仁徳と対北朝鮮インテリジェンス

康仁徳 (同時代社)

アメリカはなぜイスラエルを支援するのか

佐藤雅哉 (名古屋大学出版会)

平和を求める自由

ローレンス・レペタ (日本評論社)

犯罪被害者代理人

上谷さくら (集英社)

フェミニスト政治経済学

大橋史恵編 (大月書店)

経済学者たちの女性論

柳田芳伸 (昭和堂)

わたしもナグネだから

伊東順子 (筑摩書房)

子どもの本でジェンダーレッスン

藤木直美 (かもがわ出版)

東京で育つ／育てる

知念渉編 (有斐閣)

単身リスク

山田昌弘 (朝日新聞出版)

私が私を取り戻すまで

石川優実 (新日本出版社)

外国人の子どもの白書

荒牧重人編 (明石書店)

レスキューナースが教えるプチプラ防災 辻直美 (扶桑社)

高齢者・子ども・若者支援を考える 平野恵久 (明石書店)

〈図説〉韓国食卓の文化史

チュヨンハ (原書房)

〈自然科学〉

日本人と植物

船山信次 (原書房)

植物のすごい繁殖戦略

保谷彰彦 (河出書房新社)

野山花花図譜

梨木香歩 (淡交社)

マスが語る、川の記憶 ビル・フランソワ (築地書館)

〈工業〉

なぜ白神に登れないのか?

佐藤昌明 (無明舎出版)

育てて楽しむ、ゆるりと整うはじめてのぬか漬けレッスン

市川菜緒子 (山と溪谷社)

〈言語〉

古代文字を解説していたら、研究に取り憑かれた話

大城道則 (ポプラ社)

〈文学〉

わたしが戦場にいる

小手鞠るい (偕成社)

花と少女の日本文学

西原志保 (春秋社)

三島由紀夫を見つめて

四方田犬彦 (ホーム社)

松本清張の昭和

酒井信 (講談社)

近現代短歌

穂村弘 (河出書房新社)

飼い犬に腹を噛まれる

彬子女王 (二見研究社)

変な奴やめたい。

伊藤亜和 (ポプラ社)

シリアの家族

小松由佳 (集英社)

くらやみ小学校

堀江敏幸 (講談社)

二月のつぎに七月が

丸谷才一 (新潮社)

今は何時ですか?

山田詠美 (河出書房新社)

三頭の蝶の道

和田竜 (小学館)

最後の一日 上下

和竜 (小学館)

わたしたちの停留所と、書き写す夜

キムイソル (エトセトラブックス)

面倒だけど、幸せになってみようかクオナミ (平凡社)

無理して頑張らなくても チェウニョン (早川書房)

BIRD コートニー・コリンズ (小学館)

プレイグラウンド リチャード・パワーズ (新潮社)

午後 フェルディナント・フォン・シーラッハ (東京創元社)

〈作家と作品〉

くにたちに暮らした作家・嵐山光三郎の世界



9～10月に開催する国立市ゆかりの作家の講座です。詳細は公民館だより9月5日号をご覧ください。

\ 以下はすべて嵐山光三郎の著作です /

- *悪党芭蕉 (新潮社)
- *素人庖丁記 (講談社)
- *東京旅行記、日本百名町、新廃線紀行 (光文社)
- *昭和出版残侠传 (筑摩書房)
- *夕焼け少年、夕焼け学校、夕焼けの町 (集英社)
- *ゆうゆうヨシ子さん (中央公論新社)
- *桃仙人—小説 深沢七郎 (中央公論新社)
- *チューサン階級の冒険 (KADOKAWA)
- *活字の人さらい—愛書少年不思議譚 (筑摩書房)
- *ピッキーとポッキーのはいくえほん (福音館書店)
- *枯れてたまるか! (新講社)
- *影の日本史にせまる—西行から芭蕉へ (平凡社)
- *よろしく (集英社)
- *文人悪食 (マガジンハウス)
- *追悼の達人 (新潮社)
- *西行と清盛 (中央公論新社)

図書室のついで

『認知症の私が、
今を楽ししく生きる理由』

お話 丹野 智文(ネットトヨタ仙台)

「認知症」と聞いて、どのようなことをイメージしますか？ 自分や、家族などの身近な人が認知症になるということについて、不安を抱えている人も少なくないのではないのでしょうか。

著者の丹野さんは、39歳で若年性アルツハイマー型認知症と診断されました。現在も仕事を続けながら、自身の経験をもとに講演や相談活動を行い、「誰もが安心して認知症になれる社会」の実現に向けて全国で発信を続けていらつしやいます。

今回の講演では、丹野さんに認知症当事者としての体験談をお話いただき、「認知症」への向き合い方のヒントを得られればと思います。ぜひご参加ください。

〈丹野さんの本〉

表題作(中央法規出版)、『認知症の私から見える社会』(講談社) ほか多数



とき 10月8日(木) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 9月15日(火)朝9時

電話または申込フォームより

☎ 042(572)5141



〈私の本棚から 第6回〉

松浦弥太郎著

『価値あるもの』

―衣・食・住・旅―

高遠 敬子



私は物を買う時にいつも迷ってしまい、結局安い物に落ち着くことが度々あります。スーパーで半額シールが貼られたお惣菜を見た時すぐに買って、真夜中にお腹が膨れる失敗もよくあります。分かってはいるのですが、なかなかこの貧乏性からは抜け出せずにいて、とほほな日々です。でも、時には革の素敵な財布なんかを見ると、うーんと悩んだ末に、清水の舞台から飛び降りる時もあります。松浦弥太郎さんはそんな私を肯定するかのように、この本の中で「その小さな選択の積み重ねが、やがて『自分らしさ』というかけがえのないセンスを育て、人生を少しずつ美しくしていくのだ。」と、寄り添うように語ってくれます。そこを讀んだだけでパワーが湧いてきます。

さて、この本は「衣・食・住・旅」という4つの観点から、心にグツとくるエピソードと共に、弥太郎さんにとつての価値ある物について語られていきます。この中で私が好きな箇所は、ロンドンで定宿にしているホテルでの話。朝食のスクーオンに添えられたマーメイドがあまりに美味しく、早速支配人にたずねると、「ダルメイン」の物だと判明。ちやうど、私は今ロンドンでこの原稿を書いていたので、すぐに義理のイギリス人の弟にこのマーメイドについてたずねると「うーん、聞いたことないなあ」とボツリ。ネットで画像を検索し、さらに内容表示を拡大すると「おお、このマーメイドには、オレンジの他にグレープフルーツやレモンも入っているんだね。美味しそうだね」と。たちまち頭の中は芳醇な香りいっぱいになり、

早速試してみることに。本当にお口の中にフルーツの味が広がり、優しい味が響きました。

さて、弥太郎さんのマーメイドへの情熱を知った友人はイギリス旅行中、マーメイド作りに参加することを勧めます。そこには62歳の英国紳士のジョージさんがエプロン姿で、オレンジの選び方から下準備、煮方などを丁寧に教えてくれたそうです。そして「大好きな人へ手紙を書くように」と最後に心を込めて伝えます。ジョージさんは秋頃にマーメイド作りを始め、瓶に詰め、クリスマスになると友人一人ひとりに配るそうです。まるで手紙を渡すように。弥太郎さんもこの日以来、毎年瓶に詰めたマーメイドを友人に贈っているとのこと。もう、読んでいるだけで皆の笑顔が浮かんできます「食」は文化、人と人を結ぶ大切なコミュニケーションであることをまたまた再認識させられました。食だけでなく、旅や洋服、身の回りのことなど、様々な箇所に弥太郎さんの優しさがあふれてきて、何度も読み返してみたくまりました。この本は、普段見過ごしてしまいがちな、日常生活のキラキラした幸せに気づかせてくれる素敵なお本です。

そして、本の後半には弥太郎さん自身が大切にしている七か条について語っています。以下に簡単に説明すると、それは、「一、お散歩しよう。二、美しい本や音楽に触れよう。三、人に親切にしよう。四、身の回りを整えよう。五、規則正しい生活をしよう。六、好奇心を育てよう。七、人生哲学を考えよう。」そして、最後にもうひとつ。朝起きた時何かひとつでもやるべきことがあることに心から感謝しよう。と。「ありがとう。ほんとうにありがとう。」そう言うだけで力が湧いてくると教えてくれます。私も半年間この連載を書かせていただいたことで、すごいパワーをいただきました。本当にどうもありがとうございました。(日本経済新聞出版)